

『童蒙先習』 解題

朝 倉 治 彦

附属図書館の貴重書を見せて頂いたのを機に、これまで多少伝本調査をしてきた『童蒙先習』の書誌について、若干まとめて置きたいと思う。

一

中京大学所蔵刊本は、昭和五十四年二月二十八日の購求印が押されており、帙によって東京神田の一誠堂が扱ったものであることが知られる。上下巻の各本文第一丁右上の朱印記「桜山文庫」の蔵書印から判断して、東京の昭和女子大学に入った鹿島家のコレクションの一つであつたろうことは疑いない。

大本 二冊 整板 本文楮紙 袋綴

堅二十八、五センチ 横二十、九センチ

表紙は、当時の栗皮色表紙であるが、後装ではあるまいかと思はれる。

題簽 欠

目録題 「童蒙先習之綱目」

目録は五丁であるが、五丁目裏は白で、一面十二行、上下二卷に含まれる第一から第十五まで一括した通し目録で、各卷二段に列記してある。

柱題 「童蒙先習綱目」

下部に丁附があり、「二」至「五」。

匡郭 四周單辺 堅二十三センチ 横十七、一センチ

目録、本文全丁に匡郭があり、線に太細がある。

内題 上卷 「童蒙先習卷之一」(…八)

下卷 「童蒙先習卷之九」(…十五)

各卷内題下に「小瀬甫庵道喜居士撰」と、撰者名が明記されている。

柱題 上卷 「童蒙先習一」(…八)

下卷 「童蒙先習九」(…十五)

但し、「十二」は「十」とある。卷之十、十一通し丁、また卷十二、十三も通し丁である。

下部に丁附があつて、卷一より卷九までは、通し丁でなく、改丁である。

丁數

卷一 六丁(「二」至「六」)

卷二 二丁(「二」至「三」)

卷三 四丁(「二」至「四」)但し「三」を「二」と誤刻して、「二」が重複している。

卷四 三丁（「二」至「三」）

卷五 六丁（「二」至「六」）

卷六 二丁（「二」至「二」）

卷七 五丁（「二」至「五」）

卷八 七丁（「二」至「七」）

以上合して三十五丁、目録五丁を加算して、上巻は四十丁である。終丁裏は白。

卷九 十三丁（「一」至「十三」）

卷十 三丁

卷十一 三丁（両巻通して「二」至「六」）

卷十二 三丁

卷十三 四丁（両巻通して「二」至「七」、但し「五」とあるべきを「四」と誤刻）

卷十四 四丁（「二」至「四」）

卷十五 十丁（「二」至「十」）

以上合して、下巻本文は、四十丁である。

章段

卷一 十一

卷二 六

卷三 十一

卷四	六
卷五	十
卷六	三
卷七	三
卷八	十一（以上上巻、合六十二）
卷九	四十一
卷十	十一
卷十一	十一
卷十二	七
卷十三	十
卷十四	九
卷十五	十四（合百）

目次は、上巻巻頭に集記してあること、既に記したが、本文における小題は、囲んで、陰刻という体裁である。小題の内容は、さらに複数の短文を列記し、それぞれの文頭に○をおいている。

巻一を例に、掲げて置く。

よき物 ○八 評を加えた条がある（以下準之）

あしきもの ○四

自他互見之章（本文では「互見自他之善惡卒歸于吾章」） ○一

至てよき物 ○五

取得なき物 ○七

薬毒の異 ○一

高く思ひ深く可慮物 ○一

敬賊君之辨 ○一

受職順なる物 ○二

中のよき物 ○七

中のあしき物 ○四

本文は漢文を混用しており、漢文には、返点送仮名を施してある。一面十二行、一行約二十三字。漢字には振がなをふっている箇所もある。句点には○を使用してある。

本文の次に跋文二丁（柱刻「童蒙先習跋」）があり、従って、下巻は、全丁四十二丁となる。

跋文は漢文で、その年時は

慶長壬子孟夏初吉

壬子は、慶長十七年である。

刊記 なし 元寛の刊行か。

諸本 現在まで見ることを得た、慶長十七年有跋本は、次の諸機関に蔵されている。

国立国会図書館

大本、二冊、岡山藩校旧蔵、鉄色表紙、表紙左上に題簽がある。

童蒙先習 上(下)

内閣文庫 二本ありて、ともに大本、二冊、一本は昌平坂學問所旧蔵、薄茶表紙、一本は浅草文庫旧蔵にて改装、ともに題簽欠

大東急記念文庫

大本、二冊、鉄色表紙、題簽欠、卷五の第一丁補写、虫食少からず。

西尾市立岩瀬文庫

大本、二冊、紺表紙、題簽欠

松浦資料博物館

大本、二冊、改装、平戸藩旧蔵、外題は松浦静山自筆。

京都大学図書館

大本、三冊、改装、跋文欠、題簽佚して、中央に次の墨書

物といふものつくし 上(中、下)

この書名は、よく内容を表現している。本書が『犬枕』『尤之草子』の系統であることは、疑がない。しかし、これは仲間同志に知られたものを控えた所に、さらに増補し、評を加えたのではあるまいかと想像している。

横山重氏

大本、二冊、茶表紙、題簽欠、虫喰あり。この本は、横山氏著『書物搜索』上卷の三六七、八頁に見える本であろう。現在、慶應義塾大学図書館にある本が、この横山氏蔵本であろう。生前横山氏に見せて頂いたのであるが、記録を紛失していて詳記できない。

右と同板ではあるが、少し相違する本がある。村井古巖が林崎文庫に献納した神宮文庫現蔵の大本、二冊、紺表紙の本は、二重枠の題簽を持ち、柱刻を異にした、朝鮮の李文長の序文一丁が目次を除いて収められている。これは、既述の本の後板であろう。

この板の寛文元年中野道也求板本が、福井郷土歴史館に所蔵されている。大本、合一冊、紺表紙（万字つなぎに蔓草の空押文様）、題簽が少し残っている。福井藩旧蔵。刊記は、子持枠の中に

寛文辛丑九月望日

洛陽三條弁慶石町

書林中野道也新刊

と、三行にある。

天理図書館所蔵の正保三年中野道也刊本は、寛文元年板のもう一つ前の求板で、無刊記本の次に位置するものと思はれるが、生憎記録を見失って、ここに詳しく書けない。有題簽であったと記憶する。

以上、刊本のほかに、都立中央図書館東京志料中に、大本、二冊の写本がある。福羽美静の旧蔵にかかる場所である。尾題のあとに識語があつて、

元和九載八月 下総入道

の年月のあとに

よしなしや恥かきなかす水く□

のこらむもうき物ハラひ草

の和歌が記されている。さらに、その奥に

右以甫莽自筆之本大木喬仁伯藏物写之

明治十九年七月筆者伴操

美静○（朱印）

とあつて、書写の年代が明瞭である。横山氏の前記著書三六八頁に、次の条がある。

私は、元和九年に、下総入道という人の写した写本を買った。これはいい写本であつたが、とにかく刊本を写したものに違いなかつた。

これは、美静旧蔵写本と同系の写本であるまいか。してみると、輕々に、刊本の写しとしてしまえないように思はれる。確かに、上巻は、卷八までを収めて、刊本と同じではある。

なを、『国書総目録』に著録されている、神宮文庫蔵の慶安三年板の『童蒙先習』は、大本一冊、全十四丁、本文は漢文で、同名異書である。林崎文庫旧蔵、刊記を参考のため掲げて置く。

二条通玉屋町

慶安三年八月吉辰

野村治兵衛新刊